

許可された十数梱の船内での補充食、持てるものも何でも持ってよいとの言葉に兵士たちも、新しい服装に着替え、乗船検査免除で乗ることもできました。

私は残留命令を申告したとき、連隊長に「誓って任務を完遂いたしますので、何卒御安心ください」と復命した任務を、完全に果たし得たと確信いたし、復員後、兵庫県のお宅に報告いたしました。

食料は「重要書類篠田隊」の木札を付けましたが、他部隊とのトラブルを考えてのことで、以心伝心と言うべきか、背中いっぱいに入れ墨の部下が荷物監視を引き受け、九十日の航海中、オヤツを支給しながらの復員は、他に類を聞かぬ快挙でありました。

赤道直下の孤島に置き去られた小さな隊の語られざる裏面史は、公的記録から除かれた敗戦の悲劇であります。残留が体力回復に役だったことは嬉しいことでした。

輜重兵第十連隊

米倉（自動車）大隊の戦闘

兵庫県 高倍徳雄

昭和十九年十二月、私は輜重兵第十連隊第二大隊付主計として、部隊と共に台湾高雄港より比島に向かう輸送船上にあった。

前年六月、満州新京八一五部隊を卒業し、経理部見習士官として、原隊である北満州、佳木斯（ジャムス）の第十師団輜重兵第十連隊に帰った私は、そのまま同連隊勤務となり、糧秣係等の業務に従事、十二月には主計少尉に任官していたが、関東軍よりの南方転用が始まるとともに翌十九年七月、第十師団にも動員令が下り、あらたな編成で「鉄兵団」となって台湾に移駐、わずか三カ月後再び動員下令、比島へ向かうことになったのである。

なお、私は第一回目の動員のときから第二大隊付主

計を命ぜられており、輜重兵第十連隊は第一大隊が輓馬隊、第二大隊が自動車隊で、私はもともと第二大隊の出身なのであった。大隊長は米倉俊治大尉と言ひ、功七級金鷄勲章の持ち主で、剛毅のなかにも柔和な面を併せもった方であった。

さて当時の戦況であるが、昭和十七年ガダルカナル上陸に始まった米軍の反攻戦は、次々に南太平洋の島々を奪還して次第に勢いを増し、昭和十九年十月、ついに比島レイテ島に上陸、これを迎え撃つわが軍との間で陸、海、空の凄惨な死闘が展開され、戦局はわが方の不利に傾いていた。だから、私たちは乗船後、行く先がレイテでなくルソン島と知らされると、ホッとしたような次第であった。

マッカーサーはクリスマスにはマニラにリターンすると豪語しているとかで、敵のルソン上陸は迫っていたが、私たちがルソン島西海岸のリングエン湾に上陸したのは十二月二十三日であった。

上陸直前、僚船が敵潜水艦によって撃沈され、わが部隊は、連隊長、第一大隊長以下幹部多数を含む二百

余名の将兵と資材を失ひ、手痛い打撃を受けたが、米倉大隊長は連隊長代理としてよく部隊をまとめ、兵員貨物の揚陸も無事に終わって、部隊はバレテ峠入口付近に移動を完了した。

比島ルソン島の地形をみると、その中央部には山地が東西に横たわり、南部の平野地帯と北部山岳地帯との境をなしている。そして、南部の首都マニラを起点とし、北端アパリ港に至る間を縦貫する五号道路と呼ばれる幹線国道が、この中央部山地を越えるところが「バレテ峠」である。

比島方面軍司令官は山下奉文大将で、その作戦計画によると、軍の主力を中央部山地に集結し、他の二拠点と共に上陸してくる米軍を捕捉撃破し、敵を比島に拘束して本土進攻を遅延せしむ、と言うもので、いわば平野部を敵にあげ渡して日本軍は山中に入り、北部の穀倉地帯カガヤン溪谷を確保して持久戦を行うのである。

そうなると、カガヤン溪谷への唯一の関門であるバレテ峠の戦略上の重要さと言うものは計り知れないも

のとなるわけで、やがてこの峠の守備を命ぜられたわが「鉄兵団」は、その西方の「サラクサス峠」を守る「撃兵団」（戦車第二師団）と共に、それから数カ月にわたって米軍と激闘を展開することになるのである。

わが第二大隊は、上陸以来、師団各隊や自隊貨物の輸送を行うほか、当時方面軍の作戦準備に対応して、ルソン平野から北部に向かう潮のような軍、民の大移動のさなかにあつて、軍関係の貨物や人員の協力輸送をも引き受けて、ルソン平野を縦横に活躍していた。

主計の私は、上陸時における海没組の糧食、被服の手当をはじめ、兵站へ行って肉、野菜等の生鮮食料の補給を受けるなどの活動をしたほか、港の砂浜で爆撃の危険にさらされている、おびただし集積貨物のことを聞き込み、トラック一面を専属にもらい、連日砂浜から主に缶詰類の木箱を大量に持ち帰って、自隊糧秣の補充に努めた。砂浜にいた管理者は、「どうせ焼かれるんだから、いくらでも持って行ってくれ」とあきらめ顔で言っていたが、既に制空権は奪われ、敵機の跳梁は次第に激しさを増しており、眼前で貨物

船が爆撃される光景をながめながら缶詰を運んだようなこともあった。このときの缶詰は、のちのちまでも大いに役立つた。

「鉄兵団」は要衝バレット峠守備の命令を受け、各隊は逐次、山に入って陣地構築を始め、わが部隊も峠から北に下った地点にあるサンタフェと言う町の近郊の谷間に基地を設けて入ったが、第二大隊は間もなく更に北方山裾のアリタオ部落近くの山地に基地を移動した。海没による欠員の補充も終わり、最後に新連隊長を迎え部隊はその機能を回復した。

昭和二十年一月九日、米軍は我々の後を追うようにリンガエン湾に上陸してきた。

敵上陸とともにルソン平野において、彼我の間に激烈な戦闘が繰り広げられたが、上陸した米軍は一部をもってマニラに進撃するとともに、主力をもって中央山地のわが軍の主陸地に押し寄せ、まず、軍司令部のあったバギオ正面に猛攻を加え、次いで二月上旬バレット正面も敵の接触するところとなった。

当面の任務を終え、保有燃料も底をついたわが第二

大隊は三月初め新たな作戦命令を受けた。「第二大隊は戦闘部隊を編成して、バレテ峠南方妙高山に陣地を構築し、敵の攻撃を破砕すべし」と言うものであった。

自動車兵の持つ騎兵銃に替えて、銃身の長い九九式歩兵銃を手にした、にわか仕立ての歩兵部隊は、準備を終わると勇躍「妙高山」に向かったのである。

わが軍の陣地は五号道路をはさんで両側の山々に配備されていたが、バレテ峠を南に下った辺りの道路東側には、道路と平行して三列の山なみが南北に延びており、その真ん中の山なみが北部及び南部「妙高山」で、この名称は、わが軍が作戦上付けたものである。

ほかの山々は歩兵を中心とする部隊が陣を占めていたが、この妙高山正面の陣地が手薄であったため、輜重自動車隊であるわが第二大隊が急速第一線に起用されたということであった。

わが隊は、妙高山に着くと、歩兵第六十三連隊第三大隊陣地の前方に出て布陣し、直ちに陣地構築を開始した。陣地と言っても、にわか造りの壕にすぎず、掩蓋を設け、土嚢を積んだ少数の機関銃座と、数多くの

「たこつぼ」と称するたて穴式個人壕からなっており、南北数キロの尾根筋に、これらの壕が一面あばたのようには掘られていて、兵士たちはその中に寝起きしながら戦い続けるというものであった。

部隊の配備は、南から順に、第五中隊（中隊長井上中尉）、第六中隊の一部重機関銃隊（隊長岡崎中尉）、第四中隊（中隊長松崎中尉）、大隊本部と陣地を占めたが、後に基地に残っていた第六中隊（中隊長橋本中尉）が増援に駆けつけ大隊本部の位置に入った。

三月中ごろから、敵のこの山に対する攻撃が開始された。その戦法は、まず要所への小型爆弾投下に加え、連続してわが陣地線や後方補給路に対する圧倒的な迫撃砲の砲撃―それは一度に数十発から百発以上の砲弾が続げざまに落下するという凄まじいものである―を行い、しかる後、優勢な火力をもって歩兵による攻撃を始める。そして、わが方の火力はまだ衰えずと見ると再び砲撃からやりなおす……というやり方で、このため、わが軍は敵兵の姿を見る前に砲弾に斃れるものが数知れなかった。

それでも、わが将兵はひるまず頑張っていたが、敵は終いにはこの標高一、二〇〇メートルの山の上にブルドーザーで道をつけ戦車をあげて攻撃してきた。これに對しては、ほとんどなす術がなく、ために、わが陣地は次々に失われてゆくことになるのである。

大隊本部陣地は台地状の地形のところであったが、その台地西側直下の斜面に横穴式壕（奥行五メートルくらいで、人が立って歩けるくらいのも）を造って、米倉大隊長がそこで指揮をとり、S軍医と主計の私が大隊長と起居を共にしていた。S軍医は初老の召集将校である。

大隊長は入山以來、精力的に戦闘の指揮をとっていたが戦況は悪化の一途をたどり、その苦惱は日増しに深まる様子であった。しかし、私たちに對しては温顔を崩すことなく、時には冗談が出ることもあった。

わが第二大隊に対する糧秣等の補給は、第一大隊兵士らの臂力搬送ひりょくにより行われ、危険を冒して運ばれてきた糧食は、私が日々の実人員をにらみあわせ支給した。米で、日量四五〇グラムを最後まで保つことがで

きたことは幸いであった。

また、井上中隊陣地が敵の包囲下に陥ってからは、米倉大隊長の指示で同隊に炊飯前送を行った。新京八一五部隊で作戦給養のとき教わったのは握り飯にして前送すると言ったが、人手もなく、また包装材料もない状況下にあつたので、止むなく、乾パンの入っていた大型のブリキ空缶を使うことにして、これに炊飯を詰め、二名の兵士に一個ずつ担いで行かせた。

彼らは余分の水筒までも肩にして、夜陰に乗じて無事戦友たちに貴重な食糧を届けて帰って来たもので、実に、二回までも成功したのである。

××××

四月六日井上中隊長戦死、十日ごろには同中隊の玉砕が伝えられた。次いで、松崎中隊陣地からの連絡がとだえ同陣地の失陥が確実となつた。

いよいよ、敵のわが大隊本部陣地に対する攻撃が迫つた様子で、昼間大声で話し合ひながら作業する敵兵の声や、機械鋸で樹を切り倒す音などが聞こえるように

なった。大隊長は身支度を整え、台上の陣地へ上がって行かれたが、その日は夕刻下りてきて指揮壕のなかで休まれた。

翌朝台上陣地に上がって行くとき、だれに言うのでもないようなふうに「敵が来たら上がってこいよ」と言って、壕を出て行かれた。

そのあと、私は軍医に「S軍医殿はどうされますか？」と尋ねてみた。軍医は「私は行きません」と言下に言った。無論、彼としては死は覚悟しているに違いない。しかし、患者壕に負傷者があふれている現状では無理もないだろう。私もまだ糧秣の残量を抱えている状況にあるのだから……。いよいよ敵の攻撃が始まったなら、その時考えようと私は心に決めた。

大隊長は、その日指揮壕に下りて来られなかった。翌日の四月十九日早朝、慌ただしく駆ける兵の足音とともに「米倉大隊長戦死」と告げる声を聞いた。陣地見回り中、迫撃砲弾の直撃を受けられたということであつた。

私はついに彼と死を共にする機会を失うことになつ

た。

直ちに第六中隊長橋本部中尉が大隊長代理となつた。彼は召集将校でかなり年長者であつたが、満州以来親しくしていた間柄だつた。橋本中尉は早速私あてに伝令をよこし、その持参した通信紙をみると、「本部陣地の運命もあと二、三日と思われます。ついでには、残存糧秣を全部分配して、あとに思ひの残らぬようにしてください」とまるで手紙の依頼文のような言葉が書かれていた。

私の考えも同じであつたから、私は承知した旨の回答を書き、そのあとに、私と軍医はこの壕にいて下方の谷間から攻めてくる敵に対し、「戦うことにします」と書き添え伝令に持ち帰らせ、その日の残存糧秣を全部分配した。

翌日から始まつた敵の攻撃は激烈をきわめ、健気に応戦するわが軍との戦闘で、山上は連日轟音に包まれたが、四月二十三日午後四時ごろ、ついに敵戦車砲の咆哮がとどろくに至り、そのあと急速にわが方の銃声が衰えて合戦は終わりを告げたようであつた。夜のと

ばかりが下りた。

明日にでも敵兵がこの壕に襲ってくるだろう。軍医は、「そのときは私はこれです」と言って拳銃で額を撃つまねをした。若い私はそれではすまぬだろう。一人でも敵を斃してから死のう……と決めて眠りについた。

夜半、足音が聞こえ、同期のY少尉が兵二名を連れて壕に入ってきた。協議のうえ、後方にあった上級指揮官歩兵第六十三連隊第三大隊長宮崎少佐に状況を報告するため伝令を發した。

その夜、伝令が持ち帰った宮崎少佐の「後退すべし」との命令書によって、私たちは“生還”への第一歩を踏み出すことができた。

往時茫茫、私の脳裡にいまも比島の情景だけは消えないでいる。